



御詠一葉集  
五



伊地知文庫  
文庫20  
355  
5





能譜一葉集附合之部四

伊地知氏書冊

元禄五壬申

昔々や餅工業する様の先  
りそ古より一屋の所より  
善父入ハ只書入と尺をくけ  
りくさみありり第一持こ  
む、移月夜（二）のりあ  
ゆくと吹ぬ手毎の集れあ  
考、編、考

古亭庵佛子  
湖中  
久藏  
校 編



烏  
 妻の唇すくくつ村机をき  
 甚ふは百千もたつさあし  
 くさくさしとさする物をみちや  
 瓦つよ統の法形 朱 統  
 二三年迄のハ管おそく  
 髪をとくやーく尺ちふく  
 中敷うそけけつけさ月の  
 襟おるきぬハ角力丸の帯  
 今更の田いゆくやー高の筆まて  
 萩の早のまこいし  
 法供手考陸今も花ころる  
 白の法ーと紅の紙入  
 考 考 考 考 考

二  
 陽の傘をす側もさあ  
 手紙をたて人の名を 司  
 本籍、おれハ村のしがさ  
 美をとくーと徳をつと  
 松風のさんーと吹おそこ  
 袴ふらゆくと告の門  
 湯ハあはやーと奉るま水折  
 馬一匹子し備とを  
 小瀬市の対うたる赤人  
 痛、あけさハ女あさ  
 ちのり浄ーハ月の入  
 阿の枝ーと枝村の  
 考 考 考 考 考

二の丸の芝うらやぐ無屏風  
向もあつては行人の節の  
きくしと縁の念を喰ひあ  
口とつてはくし居堂  
心飛の花さうらに吹抜ひ  
き片を抜しのひき表板  
、 翁 、 考 、 翁

まきや小館のうらむ二段漱  
板とすさく岸のかり株  
尺知らしてきく学ばもえか  
刀の柄うらむの状  
湖風  
翁  
沾蓬  
利牛

會傍の夜を伴うる月の月  
庭之柳しおふ雪の友くら  
小楳子あは木橋のたどし  
踏一又うらむ歌をうらむ  
菊弱の色は是ふと改び  
あつた末を履の巻捨  
尺のほくの子供のきくしの法  
古くすしうらむとる餃を  
ちきくても砂場をゆくるる  
夜を焼く流る喰ひる  
月影の向は佛の墓の  
めまう人深るる草の節の

皆掛の吟のうゝ花のや  
うふも時百々花あ所み  
風臣

あのみち千 松と横や字の餅  
菊千ふれー 葉多の火  
那解き火礎のうら瑞た  
山の阿あいの 陸あゆ  
糸の千月毛の物あまの  
風いや ちりんく ぬく  
傍事にお撲はおあひさ  
帯ふころんく 金のくあ

菊

風雪

其角

菊

重

角

菊

菊きさ 初微器の南世六之  
豆まふら安膏のの集  
海まふら杖うあふる  
刹やト 志の紅表  
すけ 平功者引て陶  
ふく 心器の膏の  
尺序 一 故性 一 遠入月  
危の 終の 志の 小房  
一 通の 心人の 志の 吹  
日 永の 吹の 吹の 吹  
暖 千 終の 志の 吹  
お 殿の 志の 吹の 吹

角

菊

重

角

菊

重

角

菊

重

角

菊

重

船を浪よこしとわのたし  
堤打たゆり所への入に  
女房ふ米屋の事さるやふ  
言田の喧嘩をやあしし  
ふをさふ事の縁の枝を  
ふしあに風の石草へ木  
舟の子はあふせつて市の中  
江の枝葉の田舎階尺  
とめよりと夜入月の多阿波子  
いづこにゆくときわのゆくとん  
頼りたる四の折草の素の表  
十んすとのひる房兄身

角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角

一いハに戸を足しとる小高の  
みくくく一返して神の門あ  
業よと未末を柳むけ  
三人咲ふ妻のむくく

角 空 角 空 角

芭蕉危舎

風休のまじりてやけりやけり  
旅の草鞋のうの赤の空  
砂川にひらり又谷のかがふふ  
門らうひする醫者の森あさ  
月の夜をえしぬ火を煮し  
志ろふ瓜瓜をハサし

涼葉

角 青山 曾良 湯子 嵐

唐妻姚のよきと物あはるる空の才  
 めるみいひのいとまむ陸尺  
 くのめまう人もこころむ契うし  
 こるもあつらひなまを去  
 ひ燈を痛し顔をかぐし合  
 木賃 海つハ不致をよする  
 入うけも 細ふ言此の約の月  
 塔をいあてさるる人  
 らをるふし隣を印を扱かぬ  
 小船の文を送る村  
 此花手おなほやとめけむ  
 寺のくれ本をまのすまを水

然 榮 子 山 良 誰 翁 紫 嵐 水 水

人物も田原うし似きて牛 荒  
 かううをきけハ乞合を果  
 長うぬ髪人長いの受や  
 ちの寺うれはは若し  
 火桶すうぬぬ夜の音は清砂  
 著まの粉ふくす 聖の振  
 返るのさぬ手紙ハ掃て拾ぬん  
 おうけさ魚ハ魚のおおしよ  
 最長手風をいひ付らわのお沙  
 先々和うふ秋のよとれ  
 柿尺妻の宿まう尺細の月  
 宿うつれて小舟うこむ

山 翁 良 然 紫 榮 子 山 聖 紫

狗の尾尻さけくろ旗の童  
確珠の岩より跡の河  
ひよこししころ中をされ  
きけん本一丁酒もさき  
やよやよしおかしき世の言  
弟をくらふは人千怖き

良子 然 榮 榮

釣のなわ夜をゆきうし虫の色  
おのこれくと地割る止  
外音しきぬ月におきく  
廊のいひまきゆきす板の石

史邦  
沽圃  
菊  
真可

たやうこ子酒の思ふの智をきて  
栗丸をきく川上の山  
ころくと形のおしき石捨ふ  
きりゆれハ片の麦丸  
雨さうまらく咲く花の世  
祖父のゆき栗やあつと  
子洲のれ食を神の心を嘆  
絵まをかくる事この世  
ぎししとまふは是の藤の  
尺書をとててめぐるあや  
鉄指を戸塚の木の傳る弱  
後殺病のさゆり走のやう

沽 菊 可 菊 沽 可 菊 菊 菊 菊 菊



十人十と苗代先くむ花の色  
 光くくくくくくくくくくくく  
 幸風上吹走わくくくくくく  
 質子ふりくくくくくくく  
 以る所く獲くく魚く化糖く  
 蕙くくくくくくくくくく  
 蝶去厥能あきくくくくく  
 并當海くくくくくくく  
 くくくくくく休渡十宿をきく  
 名古きくくくくくくく  
 悴くくくくくくくくく  
 袂をぬくくくくくくく

沾可翁沾可翁沾可翁  
 沾可翁沾可翁沾可翁

お志とぬの上くくくくく  
 ちちちちちちちちちちち  
 物りくくくくくくくくく  
 文と小野くくくくくく  
 向海くくくくくくく  
 續くくくくくくくく  
 塩ぬくくくくくくく  
 素良ハやつくくくく

乙州 里園 可翁  
 沾州 里沾 乙州 里園 可翁

帳子ハくくくくくく  
 病一升を稀のことく

史邦 翁



扱よりし去休材木の行おもひ  
よもてそとれぬ中ハ生 登  
いふははと治る金ふ去月の言  
昔ふをやちて時のはりたひ  
摺新子植ていふ付たてし  
障子垂る 扇之のふり  
水南を海音のけり  
二歌 二の北 強さゆらき  
考て 芳野やあふのむさう  
百姓 やすむ苗代の心

草庵懐故人

水 釣 水 釣 水 釣 水 釣

名月や海は雨のくれを待  
窓より 枕のくぬ虫の音  
秋を 経し 庭より ささき 石の色  
まて あり あり 風のくさる  
端々 ぬ鼻 残雪ふふと  
あれハ 坂の いらえさ  
猫人の 矢矢の けしと 手を 振て  
まて あり あり 風のくさる  
入口 北 障子 くれと 一の 心  
きり あり 障子の 障板も とも  
舟こそ う 枝く 一の 心  
好く 急こ あり あり 心 障子

子 扇 川 扇 子 此 扇 涼 葉 千 川 扇 子 扇 子 川 柴 子 扇 川

伏見のしほりも之袋の底抜て  
秋のこころもさあらし  
月影の宮のまへも鳥帽子  
秋の暮の古のころ  
花吹の木のまへにすく  
わらわのまへにぬまのまへに  
筋 筋 川子 筋 筋

初草のやまのりぬ 秋の暮  
まきまきまきまき 宿の菅川  
秋のころの居村のまへにすく  
さーこころのまへに 瓶の 蓋  
半蔵 史邦 盛水 筋

塩けり餅のまへにすく 秋  
まきまきまきまき 宿の菅川  
秋のころの居村のまへにすく  
さーこころのまへに 瓶の 蓋  
半蔵 史邦 盛水 筋

花かよわかやとんしんくさくさの  
ほろくさや漢ものほろくさの  
吉風と古鼓のゆるゆる  
春のくさくさ伊丹花白  
琉球の砂子尋のおもて  
是れは時隙のゆけん物役  
元々くさくさ付あし一本  
嫁入するくさくさや  
袖ゆるゆるはゆるゆる  
月とくさくさきき油の  
昔赤き百石の北門の  
くさくさくさくさくさくさ

菊 菖 水 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

かきくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ  
出店くさくさくさくさくさくさ  
干物くさくさくさくさくさくさ  
手拭のくさくさくさくさくさくさ  
結露とくさくさくさくさくさ  
人つくく毛利細川の花さくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

くさくさくさくさくさくさくさ  
くさくさくさくさくさくさくさ

菊 菊 菊 菊

昔の月柳のころよかるとして  
坊主か——らのえりて  
松山の橋は流るの哭く  
焙爐の煙をふりて川舟  
秋の夕の涙をふりて小豆粥  
あつた月はうへに流る細手  
掛乞のえのやを持てえや  
翠の庵に尺をうりてかきの袂  
や嶺の山雀籠の中へ  
正音のえの風の煙を  
月のとくに先子所をえりてや  
きぬてえりて理おさえり

嵐景 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂

清すよふ露花の雪の初月夜  
水智のお山のまきおとてや  
うはしめすうりてえりて  
露とくうりて海へ飛ぶ  
町中のうりて森くきりて  
吹くところすれを  
草の露に地を踏まて秋の露  
伏尺のうりての音を  
玉のうりての音を  
香のうりての音を  
山代を切してけりて  
理おねいりてぬよの井

水 景 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂

つて合ハこれ上戸を以て飲酒し  
 たりとありとありこれ味こ  
 のり物と承るハ礼を以てする  
 主と見し所は是の太日  
 様柄とあり田と嘗て人の意  
 むしる所は二條さけゆく  
 不所とあり地解解の府の木綿市  
 杉葉をくえとむ去町の如雲  
 宋五休人々これらも又きん  
 きーのわろく子きけりもあそ

水 菖 堂 菊 水 菊 堂 水 菖

新株や各田の上は秋のや  
 草うしる多し代多る 厚  
 衣襟 襟もすのやうて  
 書子もふるその方 雨  
 古戰場もむ都にゆき  
 志け 尺送る 香客の意  
 さいはの門の柱やあふさし  
 書をのめれハ解と入 虹  
 水心と肩休するところ  
 解法ふの答也 ちやうきの上  
 趣りかたふる 鱈の桶 漬

西 菖 堂 菊 水 菖 堂 水 菖  
 西 菖 堂 菊 水 菖 堂 水 菖  
 西 菖 堂 菊 水 菖 堂 水 菖

洒堂

小竹の内伐りこそ幼  
籠も静れを月待の志  
梅より静る涙のさき  
あしむくく三方の鬘斗  
花の月射来り漏防く  
僅くくわのつらき

階高  
探志  
遊力  
野徑  
去来

十月三日休亭無り

くさくさく人々もよれ  
神を仕付くらまのゆ  
油ををきん小粒の味  
汁のあつくはの風とれ

菊  
許六  
酒堂  
盛水

高の月おく入行と古  
先工又する故帳の約  
才計の傍書中を移れ  
焼くくくく小流りも  
標つむきの紫をぬく  
糠礫をのほり素らぬ  
木分ハ置ぬ人とあや  
船初ハのけし楫の音  
舟ををりし新の音  
小く静の風をよ  
八月ハ船をくく小船  
焼山くくく赤とけ

扇葉  
執事  
水  
六  
葉  
水  
六  
葉  
六  
葉



歩装すくすけも花の本うけし  
行くと長馬の鞍の卵ころり  
去深く遠光の宿妻少門りや  
高麻魚を漁り發すつ  
さつとと鯉一わす事言て  
秋意くくま長持の上  
灯火の影めつーき甲侍  
山なとくま山をわつ  
吹きえ事魚の志く焚ゆされ  
尾目かよふみすの女房  
いりやうれ志と去りてふらす雲  
野道をうくえし出るのりも

水 菰 六 葉 水 菰 六 葉 水 菰 六 葉

そのむき畠山門巻の小方丈  
舌のよきく如狐長 音  
一すらしもまふ葉のまふ葉原  
藤さくふつ葉根流の坂  
宗長のうね寸白く葉の流  
葉くすくすくまむ下姓の家  
七のまふまふ廻る神未宋  
七十の葉のまふまふく

水 菰 六 葉 水 菰 六 葉

許六亭無り

二日ゆりー宗澄の宮意葉一斗  
宋五外に八の亭まの仕合まへし

淡月千言と鳥のつく空くれ  
縁館あふふあむふの里  
まききふはまの路をつらひ  
まはるやう七とまもり  
月のひらけをさかか解  
築地もまきと興ふのやう  
おふちほふんのおれさう  
枕のまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
まぬくはまの踊の路をま  
東大子の月そすまき

酒堂  
許六  
翁  
翁  
六  
翁  
翁  
六  
翁  
翁

まきとるの板ややとまきとる  
二人の柱杖法先子法く  
まきとるの提灯まきとる  
あふのまきとる落す作の子  
村をまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
まきとるの路をまきとる  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子  
あふのまきとる落す作の子

六  
翁  
翁  
六  
翁  
翁  
六  
翁  
翁

了士をよりの悉法しき丹戸のそ  
月夜子歌を流しとみ如し  
火ともしく破ゆしと子術を  
先積可くする季の物 朱  
こつすくと門の瓦手重海し  
言観るすかき崎を足る  
ととやの字朋抄を流連立  
なりぬの捨す流そかくし  
よー垣す木をゆゆの端の内  
たハ森し如る二月 翁  
神花す侍抄の蛇の糸を糸し  
柏樹よりやく字川の上

書 六 翁 景 六 翁 景 六 翁 景 六 翁 景

支梁亭口切

口きりに堺の庭を流しき  
山尺のさし美のそら 翁  
山雀のさし強く木をそら  
秋の神すのさし(の 取  
旅人の歌す月めめす  
大戸を所けしむる 裸 翁  
鶴の玉子の民を青 拵  
河のさし楢を流初し  
みとすす大田の板を柱し  
うけ葉を矢くお豆の汁

翁 支梁 嵐茶 利合 酒堂 盛水 桐実 也竹 梁 翁

こらうぬる雨も志ほつ城の羽  
檻りふくくつ古坊の楳  
とくしと陸落しふる石の上  
酒し乞食のまややすふ月  
夕雲の長門西を秋立  
あやう朽けむ一縷の清  
あけ入る花を流の百半床  
菅の二葉のゆりてけのめく  
ねをハ古寺のり柳の垣をれ  
火よりやこし解か巻の巻  
咲初て去のふもよくと旅と  
うの涙の枇杷のいすい

合 壺 水 葉 壺 梁 竹 案 合 壺 葉

九界一と頤ましくあふ松の初  
きよけりしは運をそふ社家町  
りさうりに鶴と巻を巻  
みよりの房此あふ川に  
あはまの綿の帯子月守  
らん黄をそふ門あめ坂  
波ふふの物巻しあふ香の月  
上毛吹くまらわらぬ響  
谷休ひあうりけり竹茂  
方刀持けり二こころあふ  
物まよすこれ静におる  
巻子かきくつ丸葉の

実 竹 壺 合 葉 箱 案 竹 壺 梁

菟さう 伊室の河の人通る  
まると 菜のわの神を 瑞し  
執筆 亥

木ろくしにうめ 百巻大入の  
荊口

毛をいづく 鴨の皮のやうなる 板  
酒堂

掛乞の中 狐をうすえうりまを  
局

梨の枝 おもむきぬハ 雲の月  
此筋 左柳

輝くいろくふ 茅かしの皮け  
大舟

秋風く 架 拵る 藤のやと  
千川

角のこころ 梁 の 弓  
局

六月のちも 照任を 柵の木  
杵 板  
架 雲をく 夏し 供する 浄土宗  
筋 川  
箕 向の 蹴れくもつ 山 陣  
舟 舟の 駒を おらす 藤の 蔭  
秋  
俵 子 豆の 葉を 志こく  
川 壺  
月 代と 小く さま 里の ところ 隙  
筋 筋  
手 籠い へえ ころの 順く  
筋 筋  
吾の 上 平 妙 ぼく 功 光  
局 板 筋 川 壺 舟 川 筋 板 壺

ありよしぬハ強きおそくそ  
 白吹きくくし芦 藪 じ  
 中級の破り切のこま 棒さけし  
 内ハ何事も皆捨くし  
 崎吹ハ板の宮にそくさくしと  
 板のほらくに急ぎをぬる  
 ずれ戸子袖口赤くおの絡  
 果ハこれし 摺子の時  
 泣かして古態 少くおの絡  
 師念法しし 強念を 立  
 門しすのめのかきり 紙破り玉  
 むしろくおむれとくしす 塔 福

凡峰  
 酒堂  
 嶗  
 翁  
 里東  
 翁  
 嶗  
 東  
 翁  
 嶗

山うけをせれやかしら牛の尿  
 梨地空けお吹のさけ 精  
 名月と雪舟の松北一さけ  
 下し の米を宵かふとくしお  
 花千本し家名を佛法おん  
 妻ハかきくぬ三輪の人 松  
 陽春の庭千探る 杖おく  
 多しお衣子 昔 藤 折をく  
 きんとし子娘ハ存の物おん  
 志のゆきれを尺く 和崎 狗  
 珠代の西をききし 田ハ 鶴  
 及徳ハ侍吹て 空く 秋 風

翁  
 堂  
 嶗  
 翁  
 堂  
 嶗  
 東  
 翁  
 堂  
 嶗

夕有る為鶴をわらうの音  
解きしるすの蟹の如く入  
麦の文の如飯を永くけし  
陶引する川舟の袖  
惟子千風と涼き中小姓  
ゆり所返るるを舌をの文  
美しき志の句心を似きん尺の  
人同子くると引きく珠の  
一息千地之様現の花さう  
後千のさきうまそきうめく  
きそこのころのうまうの心  
果且帳を鼻残の百

峰 堂 翁 堂 峰 其 角 堂 峰 角 堂 峰 角 堂 翁 堂 峰

十二月廿日即興

歩より入採れ梅山系  
海をわきぬの初雪の如  
月千の如浩く青を引之  
雨折のよきうゆふを強ふ  
夕月の花をけきう絶屑  
出代さして秋そきけし  
因子さうきぬえんゆ樞の  
肩くまきう如昇り親  
足え子菜うわんゆけし  
茶を煮く廻る偏旅の学寮

翁 影 崇 其 角 黃 山 桃 陸 銀 杏 崇 角 杏 翁

二張の瓦取足しすく枕一  
はめふ猫の尻をひきよめる  
あひしやうきさし世嫁の息  
現は度と意やせうく  
夜の雨おちのこもあききかむ  
三寸の跡もききしむ 唇  
まひらつと噴をもとわう節の月  
おろつあふ友を秋の夜  
言みそ水もゆける戸極  
山まよこころし丁らハ新し  
砂うら可いっ合歡のい書

山 隙 崇 角 味 角 崇 杏 山 角

かけむらひ探るる床のいよれし  
おろくぬ船子屋の波待  
まよかこ常洞宗の空うら  
真まき子いよれを焼  
尺ぬまりの主人の志をわかれ  
すここの半かかきうあうこ  
現し一と早を飯て飯の月  
おろくはしめぬやげん  
お草も近江流るる八海山  
息あれりよてこしうり  
おろく八海流るるおろく  
おろくおろくおろくおろく

山 杏 隙 崇 角 味 角 崇 杏 山 角



付さしと申してさうし柳の色  
柳葉の影のわさささ三弦  
山

源川甚道院

有代をいそぐやうにわたり  
小松のわさささ柳の影  
山  
此筋  
左柳  
酒堂  
海動  
感水  
川

是とれはあまゆいささ大  
ふさふさ急ぎいささ大  
海  
高節を年穿鑿とありし  
居風をいそぐやうにわたり  
柳の影のわさささ  
情を病のわさささ  
伊豆の海みさささ  
一夜の法り宗有定  
川  
水  
動  
筋  
柳  
山

廿不二や五月毎々二里の  
菰子小角豆おのり色志  
山

蟹の子を煮て瓜のかきさうして 翁

評六

空菊の味とやうな法大相

翁

月々ふく音うらまをこまて来た

風堂

手もまはたきやうに桐の花をむ

洒堂

猿子りのやうな聲色のこまじ

素堂

音の月よく響く室の空うして

翁

よの中をいそぎまわしうかごうと見

昔角

小誓信りしてあまうらんまのそ

弦ゆらうらうに仮のあまもの 溪石

ゆきさうの終のひのあまのこゝろ 翁

響くこゝろのあまのこゝろ 昔船

筆をまわすにゆるゆるの舟 般血子

いれと自由にお湯の行水 史邦

竹槍の葉をうらまふ月の光 去来

胸すくくうらまふ子孫の光 又草

元禄六夏酉

涼葉

池のまをうらまふ河縁の猿と志る若菜は

まごまをうらまふけしきうらまふ 千川 翁

川霧の病息をうらまふ月を尺で

翁

うきとわらふゆるあぢの柳  
秋風とむらさきをうきとるまや柳  
はと向ぬハ目さあくらふつ  
机重く瘡の方とこりふふ  
まかすそよひはけし悔めり  
尾吉の志尼ハひさし髪剃そ  
奈良ハむらさきの中こころ  
掛こころ小袖の遊をもく  
まの巻扇をも望のあくさみ  
尺の度うほや一歌の志のけく  
於てうきをやすむ信正  
出木舎と竹葉の料理を廉おそ

宗波 此篇 濁子 川 紫子 筋 筋 川 紫 筋 筋 筋

くして所く由居の砂  
物有子花の系物せりき  
むけの扇れ帯はきく  
石をむき居のたぐさく  
地元の板子尺ゆつ名苗字  
夏すはとくぬ麻のきをき  
寺のひらえハ四五及の秋  
夕有子板木はりかき塀の破  
尺よま飛を返りき  
先くあはれ去儀敷の一纏手  
是とあつらうけり子の手  
くつあはれ系さす一歳のきり

筋 川 紫 筋 筋 左柳 紫 筋 筋 筋 川 筋

何れもまよふ海の題目  
 三葉の橋より西ハ時毎 けり  
 茶屋の二階ハ酒の様 園  
 美しき顔も夫より手子けり  
 うらみの文を記す 翠のま  
 花咲ハ又未しのほろ 塚の上  
 ち花よりえさむ 蓮らん けり  
 ちらやまを夕たをけり 晴るて  
 只よふはやくも風了 吹

初 葉 翁 川 翁 茶 翁 柳 葉

翁

有り子まむ 峠の築きし  
 織有いささ火焼子すくみけり  
 使のもの子れりしやの  
 洗濯をしし 柳のけり  
 ちけりしえさむ ちす吸物  
 けり入宿の入学外て 唯一の墨  
 墨初の秋のけり 今し 乞  
 ちけりし 産葉の茶園二度 橋る  
 けりも 美子家をもむし けり  
 けり 昔の道又 変多をもし けり  
 昔し けり 是心の けり  
 ちけりし 名月をもし けり

喝子 漆葉 野地 利牛 宗波 曾良 翁 子 牛 坡 坡 葉

此のうゝ和の浦の初  
秋もそや外は清う一  
清快くす子の歌  
和のうゝ和の浦の初  
秋もそや外は清う一  
清快くす子の歌  
和のうゝ和の浦の初  
秋もそや外は清う一  
清快くす子の歌

良子牛坡菊

木橋のうゝ和の浦の初  
秋もそや外は清う一  
清快くす子の歌  
和のうゝ和の浦の初  
秋もそや外は清う一  
清快くす子の歌  
和のうゝ和の浦の初  
秋もそや外は清う一  
清快くす子の歌

良子牛坡菊

五人扶持を志ししは、柳うね  
の和（予）を海の小音  
精曳の月をちるに山こして  
そくくをけつ鏡子の影い  
暖くあつても河舟ぬ水の  
酒利みあふて酔をひび  
丸三季船くく航くふんを  
境のころゆれを予時きぬ  
去白く松と橙もまのま  
くきききのまゝに随て随きく  
腰籠り薬を一向指付子ぬ

野坡  
、 翁 、 坡 、 翁 、 坡 、 翁

数入をいであつて来て位  
野原を越えりする秋文  
くはあかすすの月け  
口（予）の海をくらり  
あふの佛く野のとも火  
咲を予十府の昔菰あふ  
くや薬をけと指三を  
さくしとくぬあまの  
捨かきしとく夕のち  
行義くをいとし供を  
焼味喰の灰中をくつ  
一振くく中集をくくけ杖

、 翁 、 坡 、 翁 、 坡 、 翁

ふと小巻からつらりと遊  
かたふたつを貫ひて中戸を覗き  
むすしの紫羅をハ昔のやむ  
市原年そのころふれくきや  
神あふする夜々うきと以  
月うけし小岸仲夏のまきい  
は昔のあしをむかへる肌  
えくくしと桐の紫羅をうき  
まけし何の巻の終古  
水とくやかこされて髪振り  
猫のあはれなる人そふい  
何のあはれぬ工丈のあはれ

箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡

二十九

掃月のふりいろの

坡

八九百ちり雨海柳り  
喜の勢はさしけりる  
初病しるまきあいの羽形  
肉のえとさつく咲の  
きのふくくおるさる月の  
狗背うれし肌をさる  
志ふ柿のこころ風うた  
除く話とる祖父の信  
根をさるくはけりる

箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡

煤 茂 志 走 八 三 巾 餅 の 一 人  
約 束 の 小 多 一 三 巾 愛 一 束 一  
十 里 付 一 巾 此 多 巾 巾 巾 巾  
其 の 葉 子 少 故 押 して 巾 巾 巾 巾  
て 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
何 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾

依 里 莫 活 菊 菊 里 菊 活 里 克 活

く ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
浮 子 子 一 口 巾 巾 巾 巾 巾  
概 の 角 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
候 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾  
巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾 巾

菊 里 菊 活 菊 菊 里 菊 活 里 克 活



その川と火入り落すくまもの  
花はくちや袖にぬきさのちとられた  
瀬のくちのちる場所の水  
里 花 山

深川にさうして

空豆の花吹くくまの隙  
崖のまの隙のけつは海川  
上張を通るくぬけのちと高橋  
その川と吹けは海の家 中  
病室の上のけつはけしめぬ宵の月  
きうくちと囀のこころは秋風  
牛 山 菊 利牛 盛水 菊 孤屋

吹の仕より此工更するし  
妹をよみ愛くくちとくち  
信都のけつくえあけをやく  
風なきくちの鳥の鳴くくち  
家のあうれくちをくち  
福汁をくちのあうれくち  
茶のくちのくちをくち  
此まはくちくちの静か  
くちくちくちくちくち  
雪のけつくちくちくち 月  
雪をくちくちくちくち  
不居れ隙と中おくちくち  
水 菊 山 水 牛 山 菊 水 菊 山 水

さつら切をよめくす  
位子の心もあはれあふ  
まゆすれくををる  
まのおくすらんて汗を  
家を送るさける智基  
くのうすうのあひさき  
手首はゆきをかた  
息災の祖父の白髪  
堪思ふくぬ七々の思  
名月のうすい合を  
すくくくくくくくく  
けくくくくくくくく

牛 鹿 翁 牛 水 翁 鹿 水 牛 鹿 翁 牛

山の根際を揺りくす  
積りくくくくくく  
きくくくくくくく  
の他尺も女子はく  
よのきくくくくく

水 翁 牛 鹿 水

十三夜曉やまはけ  
小袖の袖もくく  
焼飯す瓜の粉漬  
は任故麻のかく  
高き付くくく

濁子  
曾良  
翁  
史邦  
秋風

こみくふ 風手 風石のまや  
かり 麦をたや 勢新く 抄立て  
孝子と ゆけハ 桑橋の 昇  
松板をたきし 掃ちの 門  
ひらけ やも 夫の ありのこ  
る け 方をもと けきぬ 是を  
海へ へる 心 柿 葉の 心  
うす 月 奴 麻の 衣の 影 ありし  
言 かり 言 葉の 葉の 心 秋  
ま 庭を 打つ けし けし 秋 宜 家  
屋 あり 夫に 是の 心 積  
矢 汗と 葉を ぬく 心 あり

涼葉 盛水 菊 子 風 秋 菊 水 子 良 菊

こみくふ 風手 風石のまや  
かり 麦をたや 勢新く 抄立て  
孝子と ゆけハ 桑橋の 昇  
松板をたきし 掃ちの 門  
ひらけ やも 夫の ありのこ  
る け 方をもと けきぬ 是を  
海へ へる 心 柿 葉の 心  
うす 月 奴 麻の 衣の 影 ありし  
言 かり 言 葉の 葉の 心 秋  
ま 庭を 打つ けし けし 秋 宜 家  
屋 あり 夫に 是の 心 積  
矢 汗と 葉を ぬく 心 あり

良 子 菊 良 秋 水 風 秋 菊 水 子 良 菊

枝もく菊の枝くらひきよ  
 花のあつちをけらるる昔の昔  
 階くわきめをけけつ青  
 初春の心のおや安う  
 かりし屏風を之より夕暮  
 花やまき切紙かきしるる  
 ちや強倉の花より子

子 禁  
 良 水  
 風 紫  
 枝

十の枝をえとつてけきめくしめ外  
 静よゆゆををかえりさひ能  
 をそり能路細をよみけり

子 濁  
 水 盛

肩の枝ひし朱の枝次  
 尺之是ハ尺根より照切つ時句  
 青葉煮つ糸の因をゆめぶ  
 とうつきのまふ女房の魚やき  
 夜すりくぬす山休の髪  
 若魚子子けめり子粒なり  
 くの舟て字のり方をきく  
 船の菜と赤ふかきりる  
 化粧ぬ梅掃子す珠  
 椽の枝おるしるる昔の月  
 姨ちらうける存の義入  
 ひく位古ふ位をきりけり

子 依  
 子 水  
 子 翁  
 子 依  
 子 翁  
 子 水  
 子 翁  
 子 馬  
 子 寛

うらみとてや琴の如く  
 ちよと十とを色も花さく  
 瓜をまきつる稻の湯も物  
 手札を清沙の人の詞も  
 志厚しうたれハ凡もかく  
 持付ぬおた刀を右手かこ  
 くれハもねうらうの少く  
 夏川のちや音の激を踏ら  
 是祖のや一ふたを尺  
 家立をよ米の芽を積まね  
 厚く大をうとくけゆく  
 雨化の姿似たり水う

子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁

大原の紺屋里より久き  
 数おなくつまけハ牛と宿も  
 舟のみあそに鯨を  
 初対向の里の松を傳ひ来  
 ちり子鞋のソウめりや  
 初己も水鏡の起すおさめ  
 竿あつすめのまての花  
 ちあつハ空舟のくむむの山  
 去風さつす谷の細布

子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁 子 葉 翁

秋月廿二日  
 振るはるゆたれし  
 箱

海しハやみみ川由する行  
高匠極の小節を扱ふぬ  
行をけ山千舟を尺の舟  
舟物の餅を強さぬ秋の風  
く木の本の安ぶ玉の象  
洞のものをはた舟の舟  
星さくんくは二十八日  
いふふハ殊子軍の大小し  
淡雪の舟子鏡淡もさぬ  
的くむ掌批灯を吹けく  
肩癒へたる湯屋の言集  
上至の干菜ききむとくふぬ

野坡 孤屋 利牛 坡 翁 牛 辰 翁 坡 牛 辰 翁 坡 牛

了りやぬりをゆゑ急する  
綿貫の七らさくを祈つた  
堀り門ある五十石とく  
此島の蟹鬼もをもす内とむ  
砂子ぬくはくつる青子  
新畑の葉々着つる香の上  
吹くれくはる道とくはゆ  
川この帯の水を河ふふ  
赤地のちのくすふ藪垣  
干物を日向のすくせし  
端あし鴨の巻はくくし  
舟用上浮きを立る系伝ひ

翁 牛 辰 翁 坡 牛 辰 翁 坡 牛 辰 翁 坡 牛

又河津のしるむらめ彦ふ  
やこころも大層なも四ツの滑  
岸のよのむねの法先  
井うて傍家合の情いひ  
響こころきこふ箱をぬく月  
風止る秋の酔お尻さうり  
解の写子の體をいりゆり  
ちうはうと米の揚場のけり  
月忌ちありのまのあらえんく  
何おもかた花の三月中時を  
梅炭の落をこころふまは

牛屋坡翁 牛屋坡翁 牛屋坡翁

芥使や旅梅の回舟の舟  
こころしきく一玉子くむ  
職おろす指を延子ゆり  
おくすくむ葉の柿の木  
くす月夜子解にうの解く  
游らむ牛も足くぬお方  
おあまの山村の証をくき入  
枝のまき子跡るは連  
あまの志去られ梅の少記  
堀ハの地子あしぬ石系  
白きハ強子吸筒さけき

子翁 紫子翁 紫子翁  
涼葉 濁子

和田秩父ともいふり若堂  
掛乞の事ハ詞をゆへりけり  
よぞよくくき月枝お戸  
虫のこゝろて草の影れそ  
松とすしきも念佛のくぬ  
宿ハ形いのちありけりけり  
破籠ハさ久ぬくひすのち  
きよめをまきしるの法ふりて  
口説つるア一帖の 紙  
旅寝や長ぶ五月の和伯り  
名跡をのそく安藝の唐を  
る竹ハ尺くぬ伯母を懐く

紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子

え米こころ 酒の真 度  
焼立し庭子饅頭の月  
光くまくと和室ふゆ  
まき舞ハ仮能たま子歌心そ  
くふみそ展のちてまき  
よのつとけねをわめし路や  
紫屋敷 ちて床のかこ隅  
時をすしやとぬ帳を物うけ  
ゆめをこゝろとぬおのり  
くすまの上りゆめのこと  
徳の唐もこころとぬもの  
折花子子世のすくはる

紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子



くつ松極るて計の字子

きり菊や粉糖のうらみの端  
まけりてうらみとて大根  
尻のハカもく橋を掛初て  
門の形もやう月の多そり  
きりも秋の病のさへき  
此一管ハ桑の計手頁  
七十ふまを恨み物技持  
三尺通り意のさし  
原さるる路田の出崎とく  
箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡

垣とる牛此方靴やまの  
葉際千ちのをもとこの入  
氏うり床の松の字  
押浩の河をのりも  
路手路成付を新すま節  
田の中は場をぬ石の手  
是より花行く有能なる  
花の時祖父ハめり度  
結る宋のうまの  
店坊子青の跡を引ら  
とひ廻る子のよ  
者合を相教のうら  
坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡

一  
城の話をいふは常々  
手とるは是れは料の村の可し  
位は海の水の流るるの  
まじりしと極く風のゆるる  
極めず人の魂を多や  
月と云ふ親平不足の如き  
心と云ふは家ハ何と云ふ  
依り親と云ふは縁と云  
仕付し極く奪方の言  
田を極くむらじ近江の船の如き  
了奪と云ふは言の神也

此中並句不適意句多故不満韻而

城 水 城 水 城 水 城 水 城 水

終云

生ふくは川上におる生海流の如  
名けは白く空の菊の 菖 水  
代古の飯屋の如く有るは  
居れば極く編を八つと  
酢の指を折れハ潮の引たり  
くふと遊てくすは  
親の時とやうに醫者の如き  
中一き教の居るは  
香簾の可くは  
旅し物の中

水 菖 水 菖 水 菖 水 菖 水

麻衣をとりて見ゆる木曾の谷  
中綿の河にささるゆら風  
何れもかたむらうの海に月清く  
流るゝ又し暮し一瀬の舟けり  
造りて色を村をすくすく  
まけしをさるれに流る疾  
初やのさるふまのさる  
作歌長果の山のさる尺の

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

つらみを引居る河に  
おのれのさるる枯るる

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

有るるさるのさるる  
三味線さける旅の気合  
夕有旅のさるるさるる  
ふすまのさるる秋ささき  
大さの葉に幾さるる  
力さるる旅のさるる  
旅のさるるさるる木曾の  
村のさるるさるるさるる  
河のさるるさるるさるる  
物さるる十二さるるさるる  
依尺のさるるさるるさるる

馬 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

懐くさんて入るも羽折  
親仁しとふれうきく  
月むの青うし仕せうを  
既片くらけ餅ハ破り  
二 鎌倉の山とくく（最の妻の風  
門のたうハ大籠いささる  
舟のりし一却雨の降通る  
菰く）龍巻をたす浮丸  
鳥くふおおおききハ知う  
雲の洞江の山さなま  
入り松さるくゆ 處  
佛佛赤を律えくけすと

菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁

墨紅の小袖ハ襟のあう  
吳洲の系燈をも受す  
あ月狩の二階をたす  
月を味す一癖軒をきく  
紗の物の一雷尺ゆの  
堵す破取る袖のきり  
秋の虫糸しハハ松功者  
春加帳すつらぬあ  
不乙儀しを山の新三位  
回舟の谷すあ月つ黄

菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁

四十三

四十三

雪やちらり雪のらるる隙中さし  
 刀の柄干氷るよ 拭 霜  
 雪うらりし木きりけりけりけり  
 秋末てうらりけりけりけり  
 新くハ布子を羽打雪の力  
 研いし指の橋の平判  
 高ききりて紫の礼をきりて  
 何しむ麦ハきりけりけり  
 白檀の梢ハきりけりけり  
 髪をきりてきりけりけり  
 焚きつ物人のむしりけりけり  
 ちりけりけりけりけり

秋風 霜 然水 依良 野水 良霜 水 野水 霜

数々きりけりけりけりけり  
 出雲の物をやり上りし  
 湯島と雪がらきりけりけり  
 雪子の湯のさきしけりけり  
 初むハ雪指しけりけりけり  
 堀のつり木きりけりけりけり

風 城 良 依 坡 執事

里圃 依圃 馬寛

何きうに月尺の流の集め残  
荷うちくしと通るる次  
里

其角

まうれしゆえ様さく懐しき  
名際もゆつ陽谷の石  
出代の新物を手さうかきさ  
弱

毛純

梅らまや通るるれハ弓の音  
上る蹴るさな特る  
陽谷手廻りの牛の板めけて  
弱

木導

ま風や麦の中ゆくまのき  
陽谷いすお花は急に  
弱

長ふや音のゆくと三ヶ一  
折うしやく結子の細か  
其さうまを菜のほろまきうけ  
弱

利牛

成水

野に立圓の母方ゆうる令  
何の取れりる予の何ふ仍て能号  
まあしん古地をきま  
離るして名をふのう人  
宮極の振こしどり  
其さうのわらう東の戸を付了  
弱

法圓

古将監の古家とて

菊

月やその折の木比りの

松人あられハ折りくの

あき手廻 文の村へ来

其角 結園

雪の松折のくれハ折まふ

りのちるあはあきく

の春を一般に打ゆけ

万とまきくハ大なる

あきあき風とふハ

葉をかききく産下島地

孤屋 子珊 楓隼 利牛

あふふの大松若ふく

一通くゆく木うく

あはれあはれを織る

火とあきく古且折の内

物の葉のすくちかきく

くくくくくくくく

玄舟 舟竹 菊 命 竹

元禄七甲戌

梅くくの折とあふふ

あきくくくくく

あきくくくくく

菊 野坂

上のふるりやあつる米の直  
春のうらほろしとさし月のま  
敷くし新す秋のまひしき  
おびく菊もくさし連恋す  
娘をかきし人子あそびぬ  
素衣通ひ回し泣くまの羽暮ま  
とくハ雨の降ぬと月  
影さる味もあややわの向川岸  
ひともしひあそびお袋のしと  
よもすうく尾の持病をおきえく  
菊菊けくう残る名 月  
初月と名掛らぬもて尺の

翁 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁

鳥をとおも子居合一めお  
河原の流るるを破し花のうけ  
門しおさくしを生しのしお  
らら風をうまのうれを吹起し  
只片のすきに眩くうくふ  
江戸のあそびの舞臺のわくれて  
ららうらまのれと唯をうす  
方くし十夜めうらの降の音  
桐の木さくく月さゆるし  
門をめした月つて宿さるわき  
松のうらまをしておもてえくす  
初月と名掛の親子採菊く

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁



かゝる此まもすれぬ守人  
は市の湯治を返る花さう  
腕手をもしし喜喜の如木  
竹のたねと木の方よりたねを  
魚子うい飽候の終候  
子も候一候（二宮）一末  
未をの言のえてぬ舞羽  
晴くま〜きり候をまて木  
屏風のうけの足ゆり葉子金

坡 翁 坡 翁 坡 翁

薄の香とくまのかけ〜候

箱

牡丹のちんねらむ店場  
み〜う候と月ハもぬ取〜  
壁〜まを〜置候を替〜  
ま〜う不持〜あ〜るの〜  
山口〜する金山の砂  
吹候〜枚もお〜る〜社  
い〜も〜条の〜よ〜る〜  
大の〜れ〜ゆ〜れ〜ぬ〜  
稿〜る〜向を〜かり〜  
高〜る〜曹洞寺の〜  
漱の〜き〜う〜の〜月代  
せ〜る〜解ハ〜候〜

千川 涼葉 左柳 川 翁 坡 翁 青山 川 翁 山 翁



窓のちや敷を小庵のあや敷  
よふ雨月千化つ糸 係  
羽の鯛の子雲のあや敷  
出雲のあや敷 起  
けんくさるのさふさ 柱  
楳のうけこりよと又木  
候夏に候持こりぬ破と古  
まきふいとゆくと内の流る  
ちんちん大魚のあや敷  
あきふいとゆくと内の流る

子 珊  
秋 風  
桃 味  
八 葉  
翁 素 陳 風 珊 翁

山のうささる下市の 里  
子山のけしハ旅のきおのり  
四の月のましまさるふ  
秋末ても鳥の去れし  
雪の春の羽のこりて  
あや敷のあや敷  
正月の末まら 張治の人の  
あや敷のあや敷  
屋のほろろのあや敷  
五のあや敷ハ陽の女  
此のあや敷ハ陽の女

風 珊 翁 素 陳 風 珊 翁  
風 珊 翁 素 陳 風 珊 翁



湯のあややかのかゆふ南 香  
丹波くく候くも候くし候一鳥  
言摩々事れと利止まさ如  
ちりおし去無事を相ひあし  
只 京中へおきさえけり  
神 明のあつうとてい法もあま  
志やくくく少く事々候れり  
真の候をくくあまき一候む  
いさうくくいさうくくす候事  
東のくく事家のゆめくくく  
かろくくしや候候くくくむ  
いさうくくい候候くくあくくい

店 翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁

月つくとあうきあく礼候こ  
か〜い〜く 標くや〜く〜の候  
佛の木地を候くお系あり  
こく〜くと向ひやあをい候き  
〜く〜く 竹のく〜く 牛 標  
羽二条の候く〜くす〜物〜の  
こりいあう〜 神々〜す  
候〜も又あま〜候〜の月  
〜く〜はえ甚く〜山 昔の  
〜く〜丹か〜おろ〜 秋の〜  
〜候〜く〜の〜事〜  
〜候〜く〜生〜の〜候〜

翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁



牛流す村のささふやま有馬  
まき柴吹ちる梅檀の 花  
一枚のおひらき金扇の中は  
柄も小虎も古く細き  
有影の菖の生海龍の  
堤初らし小田の中は  
家（ハ）あよ作原の  
お斎ハ月う十五を  
秋と長と釣るる  
鳥（ハ）野のそや  
地出し松原の

観行  
吉来  
菊  
惟然  
支考  
末  
竹  
然  
野明  
青

ゆふ人（ハ）魚と  
雨気のまき（ハ）に陣  
紡草を（ハ）根家の  
植ま（ハ）居る  
春（ハ）あふ（ハ）浮世  
是（ハ）あふ（ハ）田の  
半（ハ）を（ハ）後  
川舟の濁り（ハ）る  
堤（ハ）う（ハ）れ（ハ）し  
まき（ハ）あ（ハ）ふ（ハ）竹  
系（ハ）対（ハ）の（ハ）雨（ハ）の  
此（ハ）頃（ハ）の上（ハ）の（ハ）

青  
字  
然  
竹  
末  
学  
考  
心  
然  
竹  
末

福を杖きす言の香蓮の  
くさ草工ゆふらの飛の香くさ  
ちくく(ふれくさ)神ん  
新の月起くはくさ五六服  
かぶぬく(急を志のくさ)  
着生おしるけつくはん狐  
か滅をせくは読の楢  
むすし束るまゆの袋着入  
何とけく(男の髪結  
吹物をすきまをきさる  
犯好のま袋を又ひり束  
いく口も見る束るさそりれ

熊翁末休の熊翁末休の熊翁

白くさく(あ)く(ま)のあゆ

の

二月廿三日

浪化

貴きく(あ)く(ま)のあゆ  
礼者くすく(ま)の静さ  
善父入のち静似念く(あ)く  
又時(あ)く(ま)のあゆ  
火焼きる(あ)く(ま)の月  
産心(あ)く(ま)の丸く(あ)く  
旅人(あ)く(ま)の買(あ)く(ま)の田舎  
春(あ)く(ま)のく(あ)く(ま)の末  
京(あ)く(ま)の(あ)く(ま)の引(あ)く(ま)

古来、化、末、化、



小庭しき葉の味のうゝ河  
謂分のちたひしと起る花さう  
梅咲そえして花さやうけ  
手中を松の内より料理味  
伊東の秋のいそぎき集  
上紺の木路合羽をか指さ  
湯屋のちささやハ八さうじ  
君月の控指五子可くし合  
一分してとあふ梨のきれいの  
玉味塩の候濃とくく秋の風  
不足ぬちをそ理おす  
右の手の押ひ次第の終り本

本、化、末、化、翁、本

点くけしやのお役め又  
此柄をささきして通る能の節  
春の細くわけて夕まの風  
平めふる石を安らひ水坊  
路仕をさきして下り合とふ  
月とくふ花の培梅を星と尺  
柳葉棚ハよほと霧 展  
志のふ言を踊るむと心さして  
春のうらうら可き春の候寄  
まはるとぬるすむのち横を  
春のうらうら花の咲るはれ

本、翁、化、末、化、本

四五人通る信長京あり  
新色河の子供の紐有能  
いつともまき手走るまきの中  
末翁化

紫かられをこけわて瓜の巻くれ  
吉来

中ね子字のついでと  
浪化

舟とお供のゆきいとまふ  
翁

半舟舟の初めうらうら月の入  
之道

火のくらしくと燃し良き  
支考

舟にまきとひのほる華清お  
惟然

兄弟ともい見をゆりむ  
野童  
切とし島見えさす丹波山  
野明  
そららしくおより舟のまき物  
末  
赤合ハ鯨のまきぬきささうら  
そ  
あしきまきけし新燈のさや  
考  
らくくく風をぬきて戸を敷  
考  
こそくくくと我く番の紫  
然  
砂川のほくふりつる夕月奴  
童  
あま志とこれとも軒あまつく  
明  
百もふ花の木さけの店屋物  
是  
まきぬね撫工西も見えく  
末  
此ち子標産と見えく  
学

穢場のろりおあり〜集  
新の内息をりてをとおきやう  
解つてやゆけて什敷らうや  
羽子板のまま〜二甲：船のほと  
借上しし〜妻〜ゆぬっ  
茶小紋〜結の十帖のすん〜  
子子さらき〜秋ハき〜  
比又月をぬ〜山〜  
物々〜けの鳴〜か〜は〜  
角拿つ〜神の座〜のは〜  
あ〜あ〜市の小屋掛  
此〜代物〜新〜

是の量無有学来是的量然有

新〜野力け〜換投  
お局の里〜〜ハ〜み  
海〜〜物の〜入  
花の色〜〜止〜  
〜一〜〜

的然篇学

閏五月廿二日首柿倉記  
柳骨〜〜ハ〜〜  
万引〜〜中の〜  
村〜〜  
崎〜〜石〜  
月〜〜舟の〜

篇  
酒堂  
去来  
支考  
支草

小いしうれて砂より思つく  
上をききそくし紙さきふききき  
子桶をいりお通りの法  
赤くも念ハハのまのましく  
文工の形をうけ流をうけ  
牛櫃のまぬ柳の唐棗の先  
位くをききし醜徳利をやる  
海おしとまきし雨のまきしと  
越しやききししるは  
打鯨を焼く能くある方子  
くらくしきき柳の木を森  
月花よりいさよ門をいり入つ

惟也  
堂  
翁  
末  
青  
然  
堂  
末  
子  
堂  
翁  
然  
翁

業おるす吹の土の海板  
湯をよけきき付しる醫者の代  
新着のかさのぼつとて来つ  
近口のくまききし柳をいり  
近心をよめめめめめめめ  
くすまの一本の庭の海をいり  
作おハきんと次々の田系  
おいこの細を龍のきききき  
陸のめ屋をいり吹きき  
葬礼の法し経よむ花の切  
子ぬらひ脱ておるす牛の荷  
川いりり度しききききき

子  
翁  
末  
青  
然  
堂  
末  
子  
堂  
翁  
然  
翁

41

五十一

高千のきくも 田上の虎  
正月と雪やと八きひ廿日  
持つけし末のときの名代  
咲赤の行はる砂子塔松魚  
ひえんをくけてお降さやく  
白粉をぬれとも地尾心丸  
役者持掛の衣のぬふり

子 堂 末 然 子 考 末

夕やちや夢子塔をとるえ中強  
助をふせく教の正期  
ちうこと海津と沙魚のけききて

存有 弱 惟然

了のちうくハハれ多人  
一景の珠て海ふくれの月  
稗子積算子庵の塔多ふ  
松茸と小信持ねハちくれハ  
かふゆつ生と人子か  
甚おのけきき終屋のけのく  
松の脱老子尿瓶さしちう  
まのいさゆいひこも言似唱ふ終  
くわ厚子いく度志く  
先ふくと川も言ふ多の春  
常の味ふふ試さくの稿  
月影の石塔の塔ふちう

野明 弱 然 明 弱 然 明 弱 然

馬戸のたぐふる初瀬の映鐘  
花のまき中娘移のいづむき  
去保くふくう草もぬのあ  
はるた田舎役者のあの通  
伊勢北岫千料理先より  
栞の本をすすすと風の写さ  
尾と結とぬる空をほく  
候とくをうたゆる候の月  
きくくす花さや藤の中  
秋もくやいろを色く朱より  
合点のゆるぬやのかし木  
根もくを結く文を浮花

川 始 星 行 川 星 始 行  
如 行 露 川 明 然 翁 明 然 翁 明

木より抱付て映く音 庭  
作山を写音立てた松華結  
の尾け島々上回の如木  
夏の花の鳴方きえる筆の空  
荒くふりしかかしくに  
陰れぬがハみ渡の舟りて言次  
此有末より 終る楊 麓  
昔くく花より思向の降  
くくハぬ春とまき

川 始 星 行 川 星 始 行  
如 行 露 川 明 然 翁 明 然 翁 明

みづほや夢と坊をとらふ空

有

西日をもふせく藪のひさ菊  
ひらりと海濱の鮎のほそとて  
了のちとくうハこれハ人し  
一葉の跡で酒うふこれの月  
輝の餘響に池の地もあふ  
松茸と小僧持ぬハちとまに  
ほそえうのゆを人しとく  
基石のほそきま新屋のひら  
柿の酒走りし麻瓶きしむす  
まうひと山いふてハこれハ  
し。可なり何の度志くすし  
めきしと川うらをふまの夜

菊 然 野明  
惟 然  
菊 然 菊 然 菊 然 菊 然  
菊 然 菊 然 菊 然 菊 然

朱の味ふふ丹里の綿  
月影をばしこの海をたうて  
春のたくとある海濱の入お  
花のまじりて咲ぬふきのいろ  
まろねとくう芋もわりのり  
陽の下の田舎役者の荷は通る  
修葺の楽に料理先とん  
松の木をすしと風の吹き  
尾と結くぬをそかくる  
うとくとおさうる果をたのめ  
豆腐志しつる百の月  
美しきか堀廻りのくす

菊 然 菊 然 菊 然 菊 然  
菊 然 菊 然 菊 然 菊 然  
菊 然 菊 然 菊 然 菊 然  
菊 然 菊 然 菊 然 菊 然





持佛の息年夕々さしとむ  
平陸千葉を舞之しるんこ伝  
秋風よよる門の片風石  
了季て張ら初る月ありけ  
尾張てつきしえの片年ぬる  
餅好んこりの年上りて  
正月の夕々さしとむ  
去風を舞之しるんこ伝  
羨うと村へ女けりる者  
うひうひぬ舞も男もひきひき  
向きの対る山伝へる  
花苞を捧ぐ付る枝

夕 翠 弱 者 然 方 翠 翁 守 然 方 翠 翁

こゝいこゝるの卯月神の末  
おろく伝先年しるん末の所  
伝の夕々さしとむの年をひ  
有る夕々さしとむの年をひ  
羨智の夕々さしとむの年をひ  
射付しる年をひの月をひ  
そろくしる年をひの上をひ  
伝の夕々さしとむの年をひ  
言微をひくすの年をひ  
今夕々さしとむの年をひ  
大きれ傳ゆとん年をひ  
是れ夕々さしとむの年をひ

夕 翠 弱 者 然 方 翠 翁 守 然 方 翠 翁

海りけはきし一高樹の下 了

のしと揚る病や雪の峰 翁

青葉をらつくと又之の翁 安世

流を流す舟と舟の足返り 支考

く糸糸と衣を他へ京中 空芽

月のあはれの花をきり来り 玄就

大方虫のふをそらへ峰 丹野

かろくをよめし秋の雪 芽

直く呼吸る人の空 翁

さめくくと物を思ひてまを付 玄

秋のゆつやうと海原 考

山と山と心も付るまにれ 对

去向の風を吹く 翁

能犯るむら子の居る縁の上 翁

まろくは戸の雪外の本 通

多心とめていひし中の息をきり 就

らつとよるの枝よりははく 考

月ををれの家をが 考

ありとけしとや猫さうり 芽

石塔を尺ともしるえと 芽

宵とけ伸いら情をつら子 考

こくめんれ伊方の家へ不斜 考

中火ふくむしつきの智つら  
縮着しと強をささくして光りゆく  
名はの何れを付もたる  
の月の餅とあつらふ新茶子編  
てしつらうとつらうとあつら  
萱草ハまつらうと陣秋の雨  
いづれにても訪ふ上まじ  
女はあつらふとつらぬ光輝  
尾をこれ武士の二重なるえとも  
去る所の感竹ハ杖子伐つらう  
田の草あつらふとつら不二垢  
故のたつらふとつらふのあ

龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍

酒端と名を付て春  
病ぬみし結白よんあつら  
聖らしく白とあつらとん

五 通 龍

六月廿一日

秋らくふららるのよらや四尋半  
志とららるる所つらふしつらこのあ  
月あつらあつらの大新あつら  
起つとつらふとつらつら  
つらふとつらふとつらふとつら  
つらのつらふとつらふとつら  
つらつらとつらつらつら

木 節 惟 然 支 考 考 考



桶と鹽とあつてしき篇  
扱方をもつて行し猫の道所しき  
その物をかふる掃除の  
花咲ハ茶摘とちる妻の山  
泣くしに配る赤土の岸

然 篇 考 然

松茸やしつぬ木柴の夜さう付  
秋の夕和ハ露し加りや  
宵の月河原の花を中けしに  
とくハまきけハ里のうらま  
四五人てあつてしき能成支

篇  
元代  
支考  
雪芝  
棟柱

いきりしし物もまじり  
とちのちを以てあつてしき  
屏風とてんて候成りこ  
とんし上州米のえささつ  
その子のちをまじりし合さつ  
嵐ゆくとおとんの上の香味とつ  
風子とてんてんハまきけ  
いそりしき物もまじりし木柴  
三年とてんと嫁つ子のちま  
籠のちをりふハ人年とつ  
きさきとてんてぬぬつ  
初むの垣子古井 結也

望翠  
惟然  
卓袋  
代  
考  
芝  
鯉  
翠  
篇  
袋  
萩子  
然



葉のりゆく之は種々の  
 うのりくと扱もおるる勢の取  
 きくらくにすくに傍り  
 獨基のらひきく家々くやち  
 名まると地つとまこころ  
 燒念を割てくわの冷えて  
 おまひ居てもぬえくう  
 此のろく偏の愛きくくひ  
 此のろくまてくわの冷えて  
 独りまのふ居てもぬえく  
 角力くまけていふくく  
 山くけい山代村の一角

望翠  
 云芳  
 卓袋  
 翁  
 松  
 翠  
 角  
 木白  
 力  
 翁

くのりゆく之は種々の  
 葉きくく染くくくく  
 去らふさくくくく  
 博刺の川原の石流をゆけ  
 大急の竹の長さの果とあ  
 命心の噂のちくく血の  
 一井を伐きくく本ぬ酒の物  
 響ののちくくあくくく  
 神火く茅屋の細工の板は  
 籠のちくく此相くく先  
 幕木く幕めくくく

袋  
 翁  
 翁  
 翁  
 翁  
 翁  
 翁  
 翁  
 翁  
 翁

干かゝるの志ある三月  
神主の沙汰を抄り上りて  
志々々々岸の体心代士  
衣更々越するるる新し  
かたゝと心算の事お  
耳嚮をそりて、やま枝のさき  
行義の急火屋の六尺  
大少のれ指引のけり花の信  
宋の相子のよる心二 月

白力翠桂芬菊袋翠

法ふくと第をもく板雲小

望翠

牛のくさる色を和所し一吹  
初月の難き女一虎を振る  
すれハすのけと豆腐をきり  
大ハの通るるる狭小紙  
阿老の島子編笠と尾の  
獲ありのふ心けり川おも  
野中一牛を跳ねとふや  
嫁入の事しるや丸門すく  
杖と子履を新し玉  
一伝年の一きまらる存祝氣  
能約ありかたきり海  
大さのこころて田子も島子も

惟然 去著 雪笠 梳篦 箱 車袋 九節 笠 翠 然 能 箱



寄るまゝ物をさくふ性子の旅  
まふくみきしをく尺事の端  
珠おまゝし祖母の位 ころし  
吉丸や花の木くけの一嬢  
何れややくきふ喜ぬ心風  
二 旅籠屋にひきつゝまけハちを焚  
きくいのそろふ子をわめ信  
舟板の丸手母をいふおもひ  
くましくされハ居風るのもつ  
杉櫓の一万座子さくくこの  
あふつてハこれけハハ  
舟のま入にこれくる花月市

寄 芳 翠 芝 菊 袋 共 性 芳 菊 性 袋

菊の香しらのゆるふ小葉 性  
百のゆれハ又尺くある旅の樽籠  
ともし手より色ぬぬぬ 秋  
在りし志けし痛しとと 菊  
三 舟の舟回すハ 旅痛止し  
引さしふるまゝして至る旅の門  
ひとくくくくくくくくくく 舟  
あつこと燈籠とけり思のかり  
いとくくくくくくくくくく 舟  
さハくと菊の浪ふる大舟先  
板くくくくくくくくくく 舟

袋 翠 性 芝 菊 袋 菊 性 袋

雨の故に 蛤きしふる 秋空に  
蛸着ふくく 千尺をふるさの 鮎  
夕月の光る 松ハ宮より 雲より  
くす柿いろに 咲く 露 臨  
身とそとぬ 二人 走る 山立の 花  
こゝろに け 至る 雲の け け け  
蝶 萱を 同利の うちを け け  
物し 号き 門の 能 け け  
大木の 梢ハ 枝の け け け  
時を 麦 け け け け 物  
山 け け け け け け 物

雪 芝  
霜  
大 芳  
風 表  
玄 命  
若 蘇  
弱  
麦  
芳  
霜

一里 け け け け け け  
掛物の 布 袋の 鳥 千 月 け け  
百の 葉 け け け け け け  
秋風の 雨 なる け け け け 上  
か け け け け け け け  
み け け け け け け け  
け け け け け け け け  
け け け け け け け け  
け け け け け け け け  
の け け け け け け け け  
柴 焚 け け け け け け け  
雪 竹の 杖の け け け け け 業

命  
芝  
霜  
芳  
麦  
角  
霜  
霜  
命  
芳  
霜

山後をるやわらきて  
芳のうけや 拾の掃と先  
雪ふあれや 有る流る人との  
碧毛のいづれをかさつ中極  
さひきる流るう 流はふくけり  
みゆひする 髪走はほくおし至  
申 芳 麦 命 蘊

松風より新酒をすらす観空外  
月とくくくさく石垣の上  
河の門おはく 藤の飛らえ  
支考  
藤 蘊

夏をハ 諸名の 籍を引す  
廿りとも おわしすく 妙うつらと  
この山可くし 世も 中  
藤おふつ 茶屋の虎ハまれう  
床了 天むをこそと 別  
あひす 藤の終もさす提し  
喧嘩の中をこそ 理を引のけ  
仕合と 矢檣の舟もとのうあん  
あふけと 餅のあふれうつ  
せま ( ) 流るを 流るはふ  
大工屋 根屋の 隔りの 芳  
月のあふ 世をくけぬ 藤 味  
藤 蘊

白の海は昔白ゆきやう  
 きいそとを並草してと回し秋  
 親といふ字をいしといく秋  
 月影を又くくくく素い仙  
 かうと藤巻の住れいゆり  
 咲いた手はあきあきさう  
 師寺もいけてはくく椽柳  
 孝と結のけしめめ結子あし  
 内子あつあつ子供あつあつ  
 是場の門のきい入りくくく  
 一里の舟と後のすくくく  
 山はくく密柑の色の黄く本て

考 紫 藍 考 紫 藍 考 紫 藍 考 紫 藍 考 紫 藍 考

白の海は昔白ゆきやう  
 きいそとを並草してと回し秋  
 親といふ字をいしといく秋  
 月影を又くくくく素い仙  
 かうと藤巻の住れいゆり  
 咲いた手はあきあきさう  
 師寺もいけてはくく椽柳  
 孝と結のけしめめ結子あし  
 内子あつあつ子供あつあつ  
 是場の門のきい入りくくく  
 一里の舟と後のすくくく  
 山はくく密柑の色の黄く本て

考 紫 藍 考 紫 藍 考 紫 藍 考 紫 藍 考 紫 藍 考

こぼれて生る 料のむけし  
 釣りの糸の端のほたるを尾の業  
 釣ハ吹中干生のはやつく  
 枯もさすふらふらとあふ捕の枝  
 月尺のつりも造化せしる  
 智もゆるしとさる秋の風  
 懐の小家をもさるきり  
 懐干もさししてさるけ枝  
 いそぎの齊と白豆腐もは  
 雪隠の巻さうぬく花の枝  
 根をつていさくさすの明

袋 籠 袋 考 然 然 考 袋 籠 考 袋

獲るのふれしるおのねあか  
 らを空ろれと勢ある  
 水かき池の中うそりて  
 藻糸まじる葉をいさく  
 籠りあつるとやうさの月  
 通りのあさ子と女立の秋  
 冬は家一帯してまきる鱈の魚  
 屋の病りまきを本しる  
 算り本してあつてもさる物語  
 中ふよる此状の吉良  
 釣りのさへ何とやう振るれ

沽圃 翁 支考 惟然 翁 考 然 翁 考 然 翁

山とく明抄のりきり君の  
寺ありぬき葉の枝の概楓  
山子門あつるるの月  
神風ふさげの人のうけ也  
まの露光の流のふい  
見て通る紀三井の花の足  
荷持の又西子赤およぶ  
家子子孫を大りうり  
怪味の肉炙ハ度屋一きり  
喧嘩のさこくおきりきり  
大切ぬりたりるる君は 隆

考 然 翁 考 然 翁 考 然 翁 考 然 翁

まう記のり一中の花  
末の記の床掛ハ元出家  
真の女並ハ近年の他  
酒より春のやす月尺  
赤難取を庭の正  
ささるる娘のるる  
病汗のりるるのり  
るるを流るる起るる  
大工はりのりるる  
米搗よりりるる  
かゝり市井を押し  
此のりるる生ハ花のりるる

考 然 翁 考 然 翁 考 然 翁 考 然 翁

野のゆきゆきのまきゆけぬを  
考

惟然

松茸や初子らうふ山の取  
去芳

雨子躑躅の志るふ秋  
穂難

おもしるく味す百子月言て  
翁

すこ入人あふ次は居ぬる  
芳

くこひきささりそこし互  
然

このさしこみり夜来し啼  
翁

冬けぬ熟林をこむすう積  
惟

至て廻るし停架の跡  
然

底きくふくして古風の来  
然

肉幾むて未の酒のとれ際  
惟

ちまつむる又も痛め了  
翁

と膏ハ冷の法芽生ゆ  
翁

そのめりふとるたれ一  
翁

尺すのほとれか海魚籠の内  
翁

弓ととけはくく肉丸の外  
翁

踵を引くる) 蟹の上ゆり  
翁

行よしの市に立てしを  
翁

畦止亭あし月を尺竹  
翁

外うかしあふあつ月尺  
翁

秋のゆきゆきに魚の来  
翁

畦止

五十八

家のありて地を新築し花壇を  
 つけしものなきまことのむけに  
 此のふらと来て土用をきりし  
 板の枝をたれりし色く  
 海川に下りて石を引て尺の  
 火のともりしと亭のつとめけ  
 多とれハ板のうとんのつとめけ  
 坂下して一里ほど来て  
 思ひし子とて来てし牛の糞  
 村のむね女子集りて扇の  
 嫁とてハ女とてし時をゆけ  
 大さうらうら子此秋の暮やけ

惟然 酒堂 支考 之道 青流 止 然 堂 流

けの雲を又峰之より射の月  
 すまきの中へ輝くまのこむ  
 病をきてまねく遊子とてのけ  
 折くくくぬまの旅人  
 何とてくく旅の暮れも竹のけ  
 志くくく見まけしとよ葉 延  
 めりきくと油のち崎あうくく  
 又のりてやう羽折見えし  
 名号をよくく尺をよくくし  
 竹橋のくくく山川の末  
 大根も細根をきりて杖を  
 名を授きしと月のかやけき

是 翁 考 堂 流 然 堂 止 是



ゆきふりて宿まは月子心相おさま  
 半造他てまの除ふたむ  
 幸らうとけいふも物うら  
 地よきめしけいもむうう  
 管のは中うきて一羽鏡  
 ありあきあひも持さけてけり  
 船入をゆらけし後まう三舟の種  
 枯とま新をほらうた  
 人しのかと居しぬ花差  
 里のうらまを結まううり

止 堂 流 菊 流 花 流 考 堂 然

菊月廿二日に車廂亭

秋の夜を歩きの一なる喚可菊  
 月まのけいハ菊葉あふり  
 西の山ニまの三とふる鳴りて  
 走らゆる竹のよううこくこ  
 男のあまをかんまてまふま性先  
 小納をわしる病いら大香  
 僕やうまやをこくこてあまのれ  
 かてて醫者の尺さめれまう  
 城心まゝ一の柱まきうら  
 室あてあま弁まゆめ  
 紀うら尾谷うけえまうら  
 すまきうあくハあハんま色ま心

菊 車廂 酒堂 游力 調竹 惟然 支考 菊 廂 堂 力 考

花の末ぬけハ初貨り百の換  
雨季の月め不き川 病  
火くもーく葉沙をさつ後々  
七行やうしハよろしに際ふ  
兄さうは初稿の苗花やう  
小庭形あ〜ふを秋のま

世 唐 篇 力 堂 然

所題

此そやけ人きし手秋めくれ  
吐のさくけの木やう〜つ  
月〜む葉葉のむれさのゆて  
ちんさぶ家をせし〜らむ

篇 泥足 支考 游力

了季合相抄を入し初稿  
ほ〜い〜みのと〜ら 後々  
片せぬさるのゆ〜きまか〜  
唄の夜心と糸ふ梅ら  
縁色とまの意さのゆ〜れ  
蛭子の餅の跡さき〜  
は〜の〜有する季ハ候さ  
かくさ〜草とす〜る松風  
け〜と山田の橋ハ〜  
地籠の煙の秋ハ〜  
仕りあ〜ハ〜の月  
塩飽の船のと〜と入らむ

飄竹 車肩 酒壺 睡止 惟然 龜柳 是 篇 腐 考 竹 然





兼修のすむるのけや夕陽と  
菊

のあつひと歌うえの戸はくれ  
去芳

たけけ境のひる夜  
秋立  
松

清きわの海の水の秋立  
又たわしと歌うえの戸はくれ  
松

松風こもつ山の中  
雪は  
朽しや向月さきり花の春

松風こもつ山の中  
松出  
菊

秋風こもつ山の中  
松出  
菊

年歴不知

松風こもつ山の中  
松出  
菊

松風こもつ山の中  
松出  
菊

松風こもつ山の中  
松出  
菊

松千代折 三の原のさゆ収  
いづし綱干場をきよめたるれ  
河を流るる水に人はいづれ  
林のむらさきをひききて  
天をうらむと地をいづれ  
何れく染吹風さゆれと  
白の文に生花に 以

秋風

いづし綱干場をきよめたるれ  
河を流るる水に人はいづれ  
林のむらさきをひききて  
天をうらむと地をいづれ  
何れく染吹風さゆれと  
白の文に生花に 以

かれ果てしうらふ雲のほろしき  
雲をつゞきてそらけり 後

急山やゆらぎのらやけ山 也  
可上り 破るるえり 後

宵の月をかがやいた山は月とく  
芽をひくくは小男麻の角 也

まをひくくは小男麻の角 也  
後くえりる小語を 也

八

冬のきぬこのゆきハ枯く  
世のくみいさく位のきん呼れ

くみさくみはくく一吹れし  
馬のりくくくみ病の積

庭のくく火くくくくく  
くぬ百玉のお縁のちりき

ゆきくくくくくく  
二町年く西く破のきくゆき

板の風ハ豆か〜吹  
きく〜板ハ板ハ〜柿もき

小信ふ〜ハ〜ハ〜ハ〜  
新解の結きく名良の海酌

象忘ハ色紙も持る家ハ  
字目くあきくゆき〜色紙

す〜きも切て遊子〜あ〜  
き〜あ〜く〜入海〜限

後おもしろく梅の嶺とく  
 更科の里の砦をみゆりしり  
 端居くられしゆきみ石竹  
 庭ありしきくしと物と心  
 新つ志しのかひあくもあれ  
 隙ふゆりく猫の志白  
 人しるぬ中を火燈をもよれ合  
 沙走の夕氣折指く如し

梅子一葉後の歩走人つま  
 石子しる細く小館をより分て  
 蝶掃のそり大くそあやし  
 向ひの人と、中ノきりしり  
 種つて人もけししけし方  
 釣ひききうおけりききの障りあり  
 梅もこむりし市のゆきとる  
 大和路へ入るるるすも花曇り



此一きのうらハかろく 秋之  
きのふふたハ梅の西のり

俳諧一葉集附合之部 終

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋刻成

製本所

江戸本石町十軒店

書肆

萬笈堂英大助

